

式辞（平成27年度）

平成27年度入学式にあたり、お祝いと歓迎の言葉を申し述べます。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。幾多のご努力とご苦労を経て、ついに皆さんは本学に入学されたわけで、その喜びはいかばかりかとご推察申し上げます。また、ご列席のご家族の方々にもお祝いを申し上げます。私ども本学関係者一同、この日を待ち望んでおりました。これからの日々を皆さんと共に過ごすことに、大きな喜びと、さらに大きな責任とを感じております。

最近の新聞報道によれば、投票権の年齢が18歳にまで引き下げられることがほぼ本決まりのようです。若い世代にはこれまで以上に大きな期待が寄せられることとなります。言うまでもなく、それはさらに大きな責任がかぶせられるということであり、それが若い世代にとってよいことなのかどうか、にわかには判断できません。「若さ」ということは一つの特権であって、特権を与えられてこそないうることもあるのです。その特権をそう簡単に奪ってよいものか、はるか昔に若さを失った一人として、疑問を感じないではいられません。

最近では、若い人に「頑張れ」と言っただけではいけないのだという声をよく耳にします。そして、それに呼応するかのよう、「頑張らなくていいんだ」「やってダメならやりなおせばいい」「人生はいくらでもリセットできる」「ゆっくりいこう」等々の声を聞くことが多いように思います。そこにはそれなりの時代性なり必然性があることでしょうから、特に異を唱えるつもりはありません。しかし、正直申せば、それで若者が育つのか？ という思いがあることも事実です。時代性であるとするれば、現代の若者は以前の若者よりひ弱になっているということになりそうですが、そのことと、投票権の年齢を下げることがどうリンクするのか、理解に苦しみます。

時代性ということ言えば、大学・短期大学もまた時代の波に洗われています。旧態依然たる体質を保持することはとうてい許されません。大学教育が、従来、教育する側から教育される側への一方通行になりがちであり、教育される側への配慮が必ずしも十分でなかったことは反省されなければなりません。いくら豊かな栄養を含んだ食品であっても、それを摂取する者の体質や体調によって拒否反応が生じる場合があります。うかつに「頑張れ」と言うなという教訓も、その点を踏まえたものとも考えられます。高卒者の半数以上が大学・短期大学に進学する現在、学生の個性も多様化しており、教育する側が単なる自己満足に陥らないよう、配慮する必要があります。本学でもそのための教員の研修会を行ったり、学生の意見を聞くなどして、時代の先端を行くように努めています。

しかし、そうは言っても、教育は、教育される側の意図を超えて、教育する側に「これを与えたい」という強い意欲があって、初めて成立するものです。教育される側の意図の範囲内に留まるのであれば、あえて教育を受ける意味もないこととなります。大学教育が社会のニーズに応えなければならないことは言うまでもありませんが、どのレベルで「社会のニーズ」を捉えるかには難しいものがあります。社会の変化に対応することと社会の変化に振り回されることは違います。本学は、変転する社会現象のなかで、創設以来の教育機関としての信念を保ちながら、不変の人間性に根ざした教育を心がけています。

ところで、神田地区、とりわけ本学の位置する近辺は、本学の新2号館や本学に隣接する小学館の建築工事を始めとして、現在いくつかの建築工事が進行中です。工事中は周囲に柱を立てて布で覆い、近くを通るのも不便で、決して快適な環境とは言えません。覆いをかけるのは、外界に影響を及ぼさないためですが、外界からの影響を防ぐためでもあります。覆いの中では最新の建築技術を駆使して、多くの人が汗まみれになって働いていますが、その様子を見ることはできません。そしていったん工事が完了して覆いが取り除かれると、そこには近代的な美しい建物が出現することとなります。

大学生活もそのようなものです。大学・短期大学は目に見えない布で覆われた特権的な場所なのです。特権を与えられてこそないうることもあるのです。覆いは社会からの雨風が直接かからないためであって、もちろん、それはたかさんの出入り口によって外界との行き来も自由ですが、覆われることによって勉強のための環境が整えられるという側面を否定することはできません。勉強する、ということは、決してきれいごとで済むことではありません。汗にまみれる、歯をくいしばる、という要素が伴います。友人と激論を交わす、ときには涙を流す、など、無関係な人に見られたくないような

様相を呈することもあります。それらの経験の積み重ねによって大学・短期大学に入学した目的が達成されるのですが、それは生易しいことではありません。頑張らなくてもいいんだ、とは決して申しません。それはあまりにも無責任な言葉です。頑張っ、そして、疲れたら休む——その繰り返しが大学生活であり、また、人生なのです。頑張る前から休むことを考えるようでは、大学生・短期大学生という覆いを取ったとき、そこに光り輝く社会人の姿が現れるか、不安です。

皆さん、どうぞ頑張ってください。そして、本学で、将来につながる確かなものを掴んで下さい。そのために、本学の教職員も全力を尽くします。

これをもって式辞といたします。

平成27年4月2日

共立女子大学
共立女子短期大学
学長 入江和生